

🎵 曲目紹介 🎵

ジョン・ウィリアムズ

「スター・ウォーズ」組曲

映画「スター・ウォーズ」は1977年公開の第1作を皮切りとして、今なお続編が制作され続けている広大な宇宙を舞台とした物語である。その魅力は、息もつかせぬストーリー展開、巨大な戦艦や高速の戦闘機が縦横無尽に飛び交う特殊視覚効果、神話にも比せられる綿密な世界設定など枚挙に暇がないが、ジョン・ウィリアムズ(1932-)による音楽を欠かすことはできない。映画自体を観たことがなくとも、その音楽だけはどこかで聞いたことがある方も多いだろう。

今回演奏されるのは、指揮者ズービン・メータの依頼で作られた演奏会用組曲からの抜粋である。

「メイン・タイトル」は、作品の冒頭「A long time ago in a galaxy far, far away…」(遠い昔、はるかかなたの銀河系で…)の字幕に続いて演奏される主人公ルーク・スカイウォーカーのテーマに始まり、名シーンがハイライトで綴られる。

「レイア姫のテーマ」は第8作「最後のジェダイ」(2017年公開)の撮影終了後、2016年に亡くなったキャリア・フィッシャー演じるヒロインを、「帝国のマーチ(ダース・ベイダーのテーマ)」は主人公達の前に大きく立ちはだかる暗黒の騎士を描く。

リヒャルト・ワーグナーのオペラ同様、これらのテーマが断片的に用いられることで登場人物の存在や将来を示し、映像と音楽の一体性を高めている。

(金子 光宏)

アーロン・コープランド

バレエ音楽「アパラチアの春」

1900年N.Y.ブルックリン。アーロン・コープランド(1900~1990)は、ユダヤ系ロシア移民の家に生まれた。14歳からピアノを習い、16歳で作曲家ルービン・ゴールドマークに師事。1921年(21歳)パリに留学。ジャズを取り入れた曲を書くが、次第に大衆と現代音楽の間にある隔たりを意識し出す。これが後のアメリカ民謡の取材と研究、それらと現代音楽との融合模索へと繋がる。1924年帰国後アメリカ民謡を取材・研究し、これを用いたバレエ音楽のスタイルを確立。現代アメリカを代表する作曲家の一人である。

バレエ組曲「アパラチアの春」は、1944年10月初演の同題バレエ音楽をもとに作曲家自身が編曲した管弦楽版。編成は管楽器14部(フルート2番はピッコロ持ち替え)、ティンパニ、グロッケンシュピール、シロフォン、シンバル、トライアングル、クラベス、ウッドブロック、バスドラム、スネアドラム、テーパー、ハーブ、ピアノ、弦楽器5部。

舞台は19世紀、合衆国北東部。欧州より移住した清教徒達の開拓時代。ペンシルベニア州の農村で、一組の男女が結婚式を挙げる。穏やかな冒頭部はアパラチア地方と呼ばれるこの地に訪れる春の朝、開拓民の黎明期を想起させる。曲は参列者達の高揚感を表す躍動的な明るい調へと移行。その後再び緩やかな

新郎新婦の踊りへ。突然加速するのは、参列者達が踊る民族舞曲。速度は更に増し、新婦の喜びや恐れが描かれる。そして穏やかな冒頭部が再現され、クラリネットの歌う讚美歌が登場。この主題と5つの変奏が続き、新婚の二人が未来への希望の祈りを捧げ、曲は静かに閉じられる。

(檜山 英子)

ボフスラフ・マルティヌー

交響曲 第4番

ボフスラフ・マルティヌー(Bohuslav Martinu, 1890年12月8日-1959年8月28日)は、チェコ出身の作曲家。6曲の交響曲を始め、様々な楽器のための30曲近くもの協奏曲、11作のオペラをはじめ、様々な分野で作曲を行い400作を残した多作家であった。(オーケストラ曲約50、各種協奏曲約30、室内楽曲約90、ピアノなど鍵盤楽器作品約100、声楽曲約90、合唱曲10数曲、カンタータ11、オペラやバレエなど各16本、それ以外にメロドラマや映画音楽などの曲がある。)

今回演奏する第4交響曲は、マルティヌーが、1940年にナチスから逃れアメリカに滞在・音楽活動をしていた12年間に作曲した曲になる。アメリカでは、主としてニューヨークに居を構え、創作活動に集中し、全6曲の交響曲はすべてアメリカで作曲されている。

第4交響曲は、第2次世界大戦が終結したこと、自身が帰郷できる、そんな喜びに満ちた思いの中、書き上げた作品で、マルティヌー特有の幻想的な響きと明るく伸びやかな表情を持つ作品になる。1945年4月に着手し6月に仕上げた。初演は、1945年11月30日、オーマンディ指揮、フィラデルフィア管弦楽団によって行われた。

4楽章形式で書かれており、編成は、木管が4432、金管が4331。全編に渡って使用されるピアノは特殊楽器扱いではなく、シンフォニーでレギュラーメンバーかのように機能している。第1楽章 poco moderato、第2楽章 allegro vivo(スケルツォ楽章)、第3楽章 Largo(緩徐楽章)、第4楽章 poco allegroと典型的な交響曲の構成となっている。

著名な作曲家に比べると、プロアマ問わず取り上げられる機会は多いとは言えない作曲家であるが、今回フライハイ交響楽団では、新たなチャレンジとして取り組むこととなった。20世紀に活動した作曲家で、ピアノの利用やシンコペーション、変拍子を好んだ作風であるものの、ロマン派の影響を受けた作風が特徴と言える。音楽的には同世代の作曲家が作り出した前衛性とは無縁な作風だが、ロマン派好きには親しみやすさを感じる作曲家と言えるのではないだろうか。

(堀野 史郎)